

現象学の伝統における「カントの読み替え」

フッサールとハイデガーの『純粋理性批判』解釈を中心として

オーガナイザー氏名(所属) 池田裕輔(釧路工業高等専門学校)
提題者氏名(所属) 植村玄輝(岡山大学)
丸山文隆(長野大学)
齋藤元紀(高千穂大学)
コメンテーター: 増山浩人(東京都立大学)

・ワークショップの趣旨

・カント哲学の解釈史が、多くの場合、その意図的な読み替え作業の歴史であったとすること自体に大きな誤りはないであろう。問題となるのは、むしろ、その都度、どのような読み替えがなされてきたのか、また、その哲学的な意図である。

・本ワークショップは、現象学の伝統におけるカント読み替え作業を取り上げる。この伝統においては、「経験の可能性の条件」を、経験そのものの記述的な分析によって明らかにするという独自の基本方針のもと、様々な仕方で超越論的哲学の展開がなされてきた。本ワークショップは、このような問題意識を背景になされた現象学の伝統におけるカント読み替え作業を、現象学研究者とカント研究者双方の視点から検討するものである。具体的には、上記のような現象学的な超越論的哲学の基本方針の提唱者としてのフッサールとハイデガーによる『純粋理性批判』の解釈／読み替え作業に焦点を絞る。その目的は次のふたつである：

(目的①) 第一の目的は、現象学の伝統での『純粋理性批判』読み替え作業のごく基本的な着想を明らかにし、カント解釈史研究への貢献をなすことにある。上述のように、現象学の伝統における超越論的哲学の諸構想は、「経験」的方法的な位置づけに顕著な特徴が認められる。それでは、現象学の伝統において、カントはどのように読み替えられてきたのか。本ワークショップは、この問いを手掛かりとすることで、広義の『純粋理性批判』の解釈・受容史に関心をもつ者にとつての議論の機会、また、更なる研究の端緒となることを目指すものである。

(目的②) 第二の目的は、現象学の伝統における超越論的哲学の方法をめぐる『純粋理性批判』の読み替え作業の内実と舞台裏を素描し、現象学研究の更なる進展の手がかりを手に入れることにある。現象学の伝統におけるカント解釈は、歴史的カントの精緻な再構成を意図したものではなく、むしろ、現象学のアイデンティティを、カントとの対比から描き出すことにあったといえる。それでは、肝心のカントと現象学の伝統における「超越論的哲学」の相違そのものは、どのような論点に整理できるものであるのか。この問いに答えるのが、本ワークショップにおける各提題のより具体的な課題である。以下、各提題について説明する。

1: 遡行的方法をめぐって (フッサール)

まず、植村は、カントの超越論的哲学の方法に対するフッサールの批判に着目し、その哲学的意図を明らかにする。1913年に出版された『イデーニ』以来、フッサールは超越論的現象学を標榜し、自分の仕事をカントに始まる哲学的伝統と明示的に結びつけるようになる。とはいえ、同書以降のフッサールがカントに与えた評価は限定的であり、カントの主要なアイデア(だと多くのカント研究者が認めるはずのもの)に対して、フッサールは遠慮なく批判を向ける。たとえば晩年の『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』でカントが論じられる箇所のひとつである第30節の節タイトルによれば、「直観的に証示する方法を欠いていたことがカントの神話的構築(Konstruktion)の根拠である」というの

である。本提題の目的は、(1)この節タイトルによって簡潔に要約されるフッサールのカントへの不満の内実を、いわゆる遡行的方法への批判として明確化したうえで、(2)フッサール自身の超越論的現象学をカントの立場(だとフッサールが考えたもの)への代案として再構成することにある。

2: 自由な企投に基づく現象学 (ハイデガー①)

次に、丸山は、ハイデガーの肯定的なカント評価に基づく読み替え作業に着目することで、その試みを「カント的な現象学」を提示しようとしたものとして描きだす。『存在と時間』(1927年)前後のハイデガーは、カントをフッサール的な「現象学」を背景として解釈することから出発したが、その結果は、むしろ、「現象学」を大きくカント的な方向に読み替えることに至ったと評することができる。1927年夏学期「現象学の根本諸問題」講義においてハイデガーは、フッサールのいう「現象学的還元」だけが現象学の方法ではないのであって、さらに「現象学的構築」と「現象学的破壊」が必要であると論じている。「還元」が存在者へと没入しているまなざしを離反させることであるのに対し、「構築(Konstruktion)」は「自由な企投」によってまなざしを積極的に存在へと向けることである。構築は必然的に恣意的であるほかないが、哲学史的概念の検討(「破壊」)を通じて正当化される。以上のようなハイデガーのフッサール批判のなかに、カントの「コペルニクス的転回」との親近性を読み取ることができるのである。

3:《アマルガム》としての超越論的現象学 (ハイデガー②)

これに対して、齋藤は、カントに逆らい「直観から思考が生成する」とみなすハイデガーのカント『純粋理性批判』解釈の基本図式に着目し、その背景と哲学的意図を究明する。ハイデガー独自の感性論解釈は、主にアリストテレスとフッサールに対する現象学的解釈を背景としている。第一に、ハイデガーは、感覚と思考は想像力を介するというアリストテレス『靈魂論』の魂論に立脚している。第二に、ハイデガーは、この魂の図式にフッサールの「カテゴリー的直観」の着想を導入することで、直観とカテゴリーの統合可能性を際立たせている。第三に、ハイデガーは、アリストテレスの想像力の媒介性をカントの構想力の根底に存する時間性として読み替える一方、アリストテレスのロゴスの「総合」の機能を大幅に拡張し、カントのさまざまな「総合」概念を包括しうる「総合」を有限的現存在の超越論的企投のうちに読み込んでいる。第四に、これら一連のアリストテレスとフッサール解釈を踏まえたハイデガーのカント解釈の背後には、実は超越論化の牽引役としてプラトンが控えている。カント解釈をとおしてこれら諸思想の《アマルガム》を「総合」することにより、ハイデガーは現象学の根源的な超越論化を図っているのである。

4: カント研究者の視点から

最後に、増山は、カント研究者として、各提題にコメントをおこなう。その目的は、現象学の伝統におけるカント読み替え作業の諸論点を、現代の水準からしたカント理解と対照させることで、カント研究者と現象学研究者の双方で生じかねない理解の齟齬やギャップを極力解消し、現象学の伝統におけるカント読み替え作業の射程と限界を明確化することにある。

※本ワークショップは JSPS 科研費の助成を受けたものである：「現象学の伝統における超越論的哲学の展開に関する包括的研究の構築」(科研費基盤研究(C) 研究代表者・池田裕輔 23K00044)